

武雄市民報

日本共産党武雄市委員会
武雄市議会議員江原一雄
武雄市武雄町大字武雄4092-1
電話(23) 1493
FAX(23) 1494

武雄の教育

この先どうなる？

9月定例議会に、「官民一体型学校の創設について」の議案が提出されました。
このような「教育改革」と称して行われている一連の動きについて、果たしてそれが「教育改革」といえるものなのか検討を加えたいと思います。

市民には判断の機会を与えない市政

市長は、昨年5月23日のブログに、「教育関係での記者会見を、来る7月1日、午後に行います」と書き込みました。それを受けて江原議員は、昨年6月定例議会でも中身について質問しました。それに対して市長は、内容については一切語らず「楽しみに待っていてほしい」との答弁を行いました。ところがその翌日の牟田議員の質問に対しては、「7月1日の会見については、延期をします」とブログに書いた内容を翻す答弁を行いました。この間に一体何があったのでしょうか。

その後、今年の4月に市長選が行われることになり、選挙を通じて今回の一連の教育制度の変更を市民に周知説明する機会があったにもかかわらず、結局それをひた隠しにしたまま、選挙が終わった4月17日に東京で冒頭の記者会見を行いました。教育という大きな争点の一つになったであろう事柄において、選挙での投票という民主主義においてもっとも根本的な、市民が判断をし、意思を表明する機会を奪ったといっても過言ではないでしょう。

まず敵を作る、
構図は図書館と同じ

市長は、昨年6月、ある議員の特色ある学校づくりについての質問に、「キーワードは三つ。一つ目は、不登校の子が行きたい小学校。二つ目は、ICT教育とタブレット。三つ目は移住してこれるような授業カリキュラムをする小学校に、そのため地区総意です。」と答弁していました。そして、同じく昨年12月議会では、「公教育はサビがでている、ボロが出ている」と現場で多くの業務をこなしながら日々子供達の為に頑張っている教職員の気持ちを踏みにじるような発言を行いました。

これは「開館時間が短い。開館の日数が少ない・蘭学館には人がきていない」などと突然難癖をつけ始め（実際には当時でも来館者数や貸出数は近隣でも一二を争う実績がありました）、結局CCCに図書館を任せ、蘭学館を潰してしまった時の状況と同じではないでしょうか。

本紙前号のとおり、武雄市民をオセロゲームの駒であるかのように思っている旨の発言をする藤原和博氏を特別顧問に、氏とつながりがある代田昭久氏を教育監兼武内小学校長に据え、これも藤原氏とつながりのある高濱正伸氏が代表を務める花まる学習会を公教育に取り入れるという、今回の構想は、公教育に民間の学習塾の指導方法を取り

入れた「武雄花まる学園○小学校」をつくる、などとして現在多くの地区で導入の是非を検討する協議会が立ち上げられています。本来に武雄の子どもたちのことを考えて進められてきているのでしょうか。

本来、武雄市の教育行政を担っているのは、教育委員会のはずです。図書館のCCCへの民間委託の時も、今回の民間学習塾の導入も、最初から教育委員会の方針も方策もありませんでした。すべて、市長の計画で進められてきています。

なぜ花まる？ 「メシが食える」 大人を育てる」

高濱氏は講演会などで、市長は花まる学習会の市内小学校への導入に対する議会答弁などでこの言葉を使います。そもそもメシが食える大人とはどのような大人をいうのでしょうか。このような受け手によってイメージするものが異なる言葉を使うのではなく、具体的に説明をするべきでしょう。

記者会見当初発表された資料では、ほとんどすべての授業に花まる方式が導入される予定でしたが、今現在発表されているところでは、朝15分だけ花まる方式の授業が行われるというように大幅に縮小されています。15分実施すれば「メシが食える大人」になれるのでしょうか。そのような素晴らしい効果が上がるのなら、全国的に花まる学習

会は展開されているのではないのでしょうか。

また、野外活動も特徴の一つとして挙げられています。自然の家があり、わざわざ花まるに頼らずとも野外体験学習は、充分実施可能なのではないのでしょうか。

花まるに限らず、反転授業についても当初発表された内容とはずいぶんかけ離れたものになっているようにみえます。タブレットについても授業中5分から10分の使用であるならば何故最初にあのような大々的に記者会見を行い、いたずらに市民や保護者の不安をおおる必要があったのでしょうか。

花まるを導入すれば 過疎対策になる？

現在、市内小学校区11校に地域協議会をつくり、移住者を募って人口減対策としての役割を担っていくとして地域協議会づくりが進んでいます。

市長は、ある地区の協議会に出席して「これは、過疎対策の切り札」とのべています。しかし、当初の記者会見でも発表後しばらくも、過疎対策の切り札などということは一

市民の不安は消えない

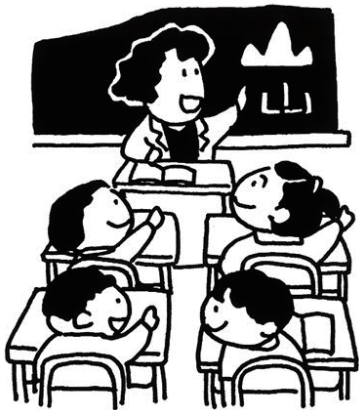
このように見えてくると、今回の一連の出来事は病院問題・図書館問題と根本は同じで、市長の独断によって「花まるありき」で進められているものであり、教育改革と呼べるようなものではないと言わざるをえません。

ここまで急激に教育を変えてしまうと、例えば武雄市から他へ移住した方、またはその逆に他から移住してこられた方にとっては、教育の行われ方の違いに戸惑いかえって逆効果になることも考えられるのではないのでしょうか。

日本の公教育の基本である、どこの地域でも同質の教育を受けられるという公教育の根幹にも関わってくる問題を抱えている、ともいえます。

そもそも教育改革を進めるのであれば、まず何を置いて教員の負担軽減を実行し、教員が一人一人の子どもたちと共有することができる時間を確保することが一番の教育改革と言えるのではないのでしょうか。そのためには今回のタブレット導入などに関する予算を30人学級の実現、あるいは大量の事務削減のために教員および事務職員の増員に回すべきではないのでしょうか。

江原議員は、「官民一体型学校の創設について」の採決において反対討論に立ち、「教育方針や学習指導方法の変更に伴っては、教育委員会と現場での研究などが進められた後でこそ必要であること。それ故、今回の官民一体型学校の創設は、導入ありきで進められていること。そのため、保護者の不安は、依然解消されず、不安を残したままである。」との反対意見を表明しました。



はばたき

コスモスの白、赤、ピンクの花が風にそよいで美しい。秋空に映えながらそよとして立つ様は日本の美を象徴するかのよう。秋桜とはよく言ったもの▼NHK朝の連続テレビ「花子とアン」はさまざまな人間模様をえがいて見ごたえがあった。母親（蓮子）が自分の息子を戦争に奪われ失った悲痛な思いをこめ、電波を通して同じ悲しみの中にある多くの母親たちに、平和のために力を合わせようと訴える場面は強く心を打った▼平和を語るとき、あの太平洋戦争で日本が唯一、地上戦に巻き込まれ、四人に一人が犠牲となつた沖縄のことから目をそらすことはできない▼戦後は「銃剣とブルドーザー」で土地を奪われ、基地に押しひしがれながら、島民はだれしも祖国日本への復帰を願った。憲法がまぶしく輝く祖国へ▼全島あげた粘り強い復帰運動の末、米日政府はようやく占領下の沖縄の人々を「解放」した。だが、日本国憲法のもとで基地が取り除かれ平穏な暮らしができる、危険から解放されることの島民の喜びと期待は裏切られた▼わずかな土地に日本に在る米軍基地の74％がひしめく沖縄。政府は危険な普天間飛行場を移すと偽って、国民の税金を使い巨大な設備の新しい基地造りを強行しようとしている。名護市長、市議選挙で四度にわたり「新基地ノー」の民意が示された、というのに▼沖縄の人々はガマンもこれまでと「オール沖縄」に結集し、復帰運動を上回る勢いで歴史的審判の日、11月16日の知事選投票日を迎えようとしている。沖縄の花ハイビスカスよ、汝が紅は島の隅々に！

新幹線でヒト・モノ・カネ 呼び込み？



左の写真は博多駅の新幹線ホーム階段に掲げられた武雄市図書館の広告看板です。この費用201万円。公立

図書館の広告は他に例がないことから、江原議員が質問したところ、「人、モノ、カネを呼び込むことを考えた」と市長答弁。図書館は教育施設のはずなのに、武雄市長

の手にかかる図書館はたちまち商業施設。武雄市長は世界にもまれな手品師なのかも？

つじつま合わせに
新子ども
図書館？

新たに子ども図書館をつ

くることが検討されています。今の文化会館大ホールをとり壊してつくと言うのですが、ちぐはぐな印象は否めません。改修前の図書館には、児童への読み聞かせの部屋が備えつけてあったのを潰したためにお母さんたちからは不満の声が噴き出していました。市民の目には、つじつま合わせにしか映りません。改修計画の当初から、児童向けのスペースを入れておれば、こんなことにはならなかったでしょう。そのために、また新たに2億円かけて子ども図書館をつくらなければならぬ羽目に。あつたものを壊して、つくり直す、つまりは、市長の独断専行のミスを市民がしりぬぐいさせられる形です。

主張

どこまでも続くコバルトブルー

の海。絶滅が心配されるジュゴンが安らぐ海。この海を埋め立てて、アメリカ海兵隊の最新鋭の基地を造る：自分はその仕事にたずさわってきたと得意げに語る武雄市長。だからオスプレイが佐賀空港に配備されることに賛成だとの9月議会答弁でした。

資格が問われる

この7月、突然降ってわいてきた佐賀民間空港の自衛隊利用。オスプレイは悪名高い欠陥機、06年から11年までの5年間に58回(米軍資料)も事故を起こしています。つい最近も、ペルシャ湾での事故で米兵が1人死亡したばかりです。先ず危ぶまれるのが空の安全、佐賀空港を拠点に四方八方を飛び回るわけですから、空

港周辺はもとより、県内外各地でいつ墜落するかも知れない危険と恐怖心をまきちらします。その爆音はこれまでのヘリコプターの比ではありません。であればこそ、一昨年9月、米軍普天間飛行場にオスプレイ12機(現在24機)が配備されるとあつて、10万人を超える沖縄の人たちが抗議集会を開いたのです。それでもアメリカは強引にそれを強行しました。そして、それがつぎつぎと本土に飛来し、全国で反対運動がまき起こっています。

佐賀空港建設に際して、佐賀県や佐賀市は地元の有明海漁協と協定を結び、空港の軍事利用はしないと約束しています。そのこともあつて、県内自治体のほとんどは否定的あるいは慎重な態度をとっています。県民の73・1％が米軍の訓練移転に反対(佐賀新聞8月31日付)が背景にあります。武雄市長の賛成姿勢は際立っています。沖縄県民の8割が「新基地ノ」と反対する辺野古移設を是認し、県民7割以上が反対する米軍訓練移転に賛成するといふのです。民意を無視する点では安倍首相そっくりです。自治体は住民の安全を守ることを第一の責務とする(地方自治法第二条)を放棄し、集団的自衛権行使と一体の佐賀空港の巨大軍事基地化にエールを送る、非核平和を宣言した武雄市の首長としての資格が問われています。

自治体キャラバンが武雄市を訪問



武雄市役所で要請行動

9月30日、社会保障推進協議会のメンバー10人が武雄市役所を訪れました。一行は自治体キャラバンと銘打って、佐賀県内20の市町村をすべて訪問し、行つた先々でそれぞれの社会保障の実態を聴き取りながら、全国的な社会保障制度の改善を求めようと毎年、おこなわれているものです。今年は武雄市からも、江原議員はじめ5人が合流して、具体的に市の対応について指摘をおこないながら、改善を求めました。

要請は子育て、国民健康保険、障がい者(児)、生活保護、年金、自治体労働者、オスプレイなど多岐にわたりました。市側からは、担当の課長をはじめ職員が出席し丁寧に対応してくれました。なかには制度の改善を市からも県や国に求めるよう要望したのに対しては、「国が決めることだから、要請する立場にない」との回答があり、一行からたしなめられる場面もありました。要請行動は、正午を超えて2時間余りに及びました。

オスプレイ配備反対

市民の願い届かず



「公開質問」をイチヤモン呼ばわり

たび重なる暴言の撤回を求め、市民から公開質問されている樋渡市長は、期限までに回答しなかったばかりか、そのことを江原議員にとがめられた9月議会一般質問で、市長は「あれは言いがかり、イチヤモン」だと開き直りました。

ことは議会と議員に対する市長の根本的な態度の問題として議会制民主主義にかかわる重大事件でした。公開の場で、議員にたいして「あなたを信用していない」と罵倒したことがどんなに異常であるかをまったく理解しない、民主主義のカケラもわきまえない二重三重の不遜な態度です。市民から信任を受けた議員に対する侮辱はただちに市民に対する許しがたい侮辱です。

謝罪と発言撤回を求められて、反省するどころか開き直る、こんな粗野で人権感覚がまったくない首長こそ市民・県民から信用されないのではないでしうか。



削減も市長発

ある市議会の視察団に市長は、あいさつの中で、武雄市議会には、保守も、良い保守と悪い保守がいる、議員定数24は多すぎる、20にと発言。これを聞いた視察議員は、驚いたと。武雄市議会のありようも、「市長発」です。市長の姿勢が問われます。

議会では山口等議員が反対、江原一雄議員が賛成、牟田勝浩議員が反対の討論をそれぞれ行い、採決の結果、1対22で不採択となりました。